



オリーブとニューノーマル



理事 岡崎 淳

列車で瀬戸大橋を渡っていると、蒼く光る穏やかな海と緑の小さな島々、そしてその間を行き交う大小の船を見下ろすことができます。更に高松からフェリーで1時間、小豆島の小さな港に到着です。島を車で走ると、醤油の芳ばしい香りがしてきます。黒い蓋の古い醤油蔵がずらりと立ち並ぶ「醤の郷（ひしおのさと）」です。良質の塩、麹が発酵するのに適した温暖な気候など環境がそろっています。

その環境の恩恵もあって小豆島には他にも数多くの産業があります。特に、オリーブの一大産地であることは有名で「オリーブアイランド」と呼ばれています。2008年にはこの島にオリーブが根付いて100年を迎えました。

なぜ、小豆島にオリーブなのか。当時、日本では漁獲量が増え加工保存の必要が生じました。研究の結果、オリーブオイル漬けの缶詰が長期保存に適していることがわかりましたが、オリーブオイルは輸入が主で高価であったため、国内で試験的に生産することになりました。生産地に選ばれた三重、鹿児島、香川の3県のうち、台風や虫の被害で前者2県での栽培は失敗に終わりましたが、香川の小豆島には無事オリーブが根付き、今では、国産オリーブオイルの8割近くがここで生産されているそうです。

小豆島は『二十四の瞳』の舞台としても知られています。100年前は、主人公の“おなご先生（大石先生）”が生まれた頃でしょうか。オリーブの花言葉は「平和」だそうです。ハイカラで平和を希求する大石先生はオリーブの木がモデルになった様にも思えてきます。

オリーブにとって記念すべき2008年に、職員旅行でこの島を訪れ、カタドール（オリーブオイル鑑定士）の方に教わってオリーブオイル作りを体験しました。オリーブの実を一粒一粒大切に手で摘み取り、その日の新鮮なうちに実を絞り、一晩かけて漉すと、微量ながらエキストラバージンオイルができあがります。オリーブには「ハート型の葉を見つけた人は幸せになる」という言い伝えがあるそうです。その願いも込めて、子どもたちへのプレゼントにオリーブの葉でリースも作りました。

職員旅行の実施や参加には賛否があります。時代に逆行しているかもしれませんが、当法人では毎年、希望者を募り各地へ出掛けています。渋々参加した職員も、そこで経験したことを振り返った時に、人生において有意義な時間であったと感じてもらっていると信じています。

昨今、新型コロナウイルスの影響だけでなく、社会の常識や価値観が大きく変化しています。この事態が落ち着いたとしても、以前のように職員旅行ができるのか、新たなスタイルや代替プランになるのか、今は漠然と考えるしかできません。職員旅行は一例で、今後、新しい常識・新しい生活様式＝「ニューノーマル」への対応を様々な場面で求められるでしょう。それを受け入れることに苦勞するのは、経験豊富な大人なのかもしれません。しかし、その未来で生きる子どもたちへ、何かを残していくことは大人にしかできないことだとも思います。